日本分析化学会第 51 年会をふり返って

喜多村　昇

1993 年 4 月から北大理学部化学科の分析化学研究室を担当することになってから 13 年間、分析北海道支部の幹事を仰せつかっている。支部設立 50 周年から考えると、私自身の在籍期間はその 1/3 にも満たず、50 周年記念冊子に寄稿するほど支部への貢献があるわけではない。ただ、支部担当の 2002 年日本分析化学会年会の実行委員長などを仰せつかった経緯があるので、そのあたりの事を支部の歴史の 1 つとして書き止めておくことにさせて頂きたい。

日本分析化学会第 51 年会は 2002 年の 10 月 19 日（木）から 21 日（土）の 3 日間に亘り、北大の高等機能教育開発総合センターおよび学術交流会館（授賞式・受賞講演）で開催された。詳しくは 2002 年の「ぶんせき」12 号、p.714~716 にあるが、講演件数 830 件、参加登録者数 1350 名で、まずまず盛況の年会であった。

年会、討論会は 7 つの支部で順次、当番制で担当する。そのため、通例では、開催の 2 年前に分析化学会本部から担当依頼が支部に届くことになっている。実際に、51 年会は北海道支部が担当することが 2000 年 6 月の本部理事会において確認されている。当初、51 年会は函館の北大水産学部で開催が予定されていたが、会場数が足りないため再考されることになった。そのため、2001 年の 4 月には北大の札幌キャンパスで開催されることになり、急転直下、私が実行委員長を仰せつかることになってしまった。前回の支部担当 44 年会は北大工学部の渡辺寛人先生が実行委員長をされたため、51 年会は理学部でということであろう。実行委員長に指名された 51 年会の準備委員会は 2001 年 4 月 20 日であり、その 1 週間後に第 1 回支部幹事会が開催されている。支部幹事会に 51 年会の準備状況を報告するためには、このタイミングしかなかったのであろう。

幸い、51 年会は支部幹事の先生方や各研究室からのアルバイト学生の強力なご支援で滞りなく開催することができた。唯一思い通りに行かなかったのは「寄付金集め」である。実行委員会では、過去の支部担当年会・討論会の開催の経緯どおり、広く企業などに醵金をつのり、これを年会の運営資金とすることにしていた。そのため、実行委員長名で醵金のお願いをしたところ、分析本部から「醵金を募ることは理事会の承認事項で、まかりならぬ」という指摘を受けることになった。そのような本部の内規（？）があることは、つゆ知らず、寝耳に水の驚きであったとともに、分析化学会会長・事務局への事情説明と事後処理を求められるなど、大慌てであった。いずれにせよ、この問題にも何とか決着をつけることができ、年会を迎えることができた。これ以降、寄付金の理事会承認の件は本部・支部連絡会議などで改めて確認されているようである。

予想外の喜びもあった。札幌ファクトリーのビアホールで開催した懇親会である。もちろんビールは飲み放題であり、乾杯の挨拶のあとはスピーチもアトラクションも無しで、とにかくビールと食べ物を楽しんでもらう趣向とした。場所柄、ホテルの宴会場を借り切るのとは違い、安く気楽な懇親会となった。食べ物はふんだんに出され、想定外なことにかなり食べ残しが出てしまった。食べ残しはもったいなく申し訳ないが、その後の年会や

討論会の折に、51 年会の懇親会は「安くて、おいしくて、飲み物・食べ物ふんだんだった」と言って頂き、大好評だったようである。食べ物の恨みは怖いので、本当によかったと今さらながら思っている。恐らく、次回の支部担当年会の懇親会も道外の先生方から楽しみにしているであろう。

個人的思い出であるが、51 年会が開催された 2002 年は、理学部本館に居を構えていた我が研究室を含めた化学科の研究室（旧化学科）が、新設された現在の理学部 6 号館に移転する年（6〜7 月）であった。また、この年は第 1 期の 21 世紀 COE（化学・材料分野）の申請年でもあった。したがって、この年は研究室移転・立ち上げ（5〜7 月）、COE 申請準備（5〜8 月）、年会準備・決済（9〜11 月）と立て続けの大仕事で目の回る年であった。残念ながら（当時はそう思った）COE は不首尾に終わったが、引越しについては研究室のスタッフ・学生諸氏、年会については支部の方々と研究室秘書の小林（旧姓　畠山）美奈子さんの活躍により無難にこなすことができた。あらためて、これらの方々の協力に心から感謝の意を表したい。

（北海道大学理学研究院）